

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 ムスリン イーリヤ

ムスリン氏の論文は、1980年代以降の北米で展開している宗教心理学の諸理論を広い視野から展望して、そこでの「宗教」および「死」の理解ないし位置づけを精査検討したものである。そしてそれによって、各理論の特長や問題点を宗教学ないし死生学の観点から見出して、今後の研究の展開の可能性を探ることを目指している。具体的に扱われるのは、「恐怖管理理論」、「意味管理理論」、「合理的選択理論」、「愛着理論」、「進化心理学」の五つで、これらはそれぞれ異なった基礎理論をもとに、多様な研究方法を駆使して多方面での研究活動を展開している有力な動向群である。

論文全体の意義と方法を明示する「序論」に続いて、第1章では、北米心理学の学史を成立期からたどり、第二次大戦後に上記の諸理論を基礎づける考え方が生まれてきた経緯が見定められる。以後、第2章から第6章にわたって、上記の五つの理論それぞれについて、そこで「宗教」および「死」がじっさいにどのように扱われ、意義づけられているかを多量の研究文献の読解によって抽出していく作業がなされる。これが本論文の中心をなすが、その過程で、それぞれの理論がもつ「宗教」理解、「死」の捉え方の特徴が明らかにされるとともに、宗教学および死生学的観点から見たときのそれぞれの問題性も指摘される。総括的に言えば、従来の宗教学が見出してきた宗教的世界観や実態の文化的・地域的・歴史的多様性、また死生学が明らかにした「死」をめぐる態度の個人レベルおよび社会レベルでの可変性や多様性が十分に考慮されていないことの指摘である。そしてそれが、欧米の心理学者たちが意識的・無意識的に採用している宗教観、死生観を反映したものであること、ひいてはそれぞれの理論が依拠する基礎理論の性格に由来するものであることが主張される。

こうした検討にもとづいて、「結論」となる第7章では、諸理論間の対立関係や親縁性がいくつかの観点から整理されて、各理論の相互関係が明らかにされる。これは現代の北米心理学における宗教および死を巡る理論群が織りなす一種の地勢図を描くものとなっており、各理論の適切な理解や評価に資するだけでなく、諸理論の相互補完的な協働の可能性を示唆するものでもある。現在の日本の宗教研究が比較的手薄な領域に踏み込み、そこでその知見を宗教研究・死生学研究に活用する地盤を提供した意義も大きい。諸理論の検討の視点がやや一面的に留まり、ときに叙述のバランスを欠くように見える難点はあるものの、人文社会科学的宗教学・死生学の視点に立って現代の実証的心理学における宗教研究・「死」研究の意義と課題を明確化しえた本研究は、学問分野を有意義に架橋していく可能性を具体的に示すものでもあり、博士（文学）の学位授与に値するものと判断する。